

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

奈良県に「六斎念仏」という在家の念仏が伝承されている。阿弥陀如来への帰依を意味する六字名号「南無阿弥陀仏」を、「ナアムウア、アーアアア、アミダー」などのように、声を引き、抑揚をつけながら唱和する「詠う念仏」だ。古代以来、六斎日（毎月8、14、15、23、29日、晦日）は殺生をせず斎戒謹慎すべきとされ、15世紀半ば以降「六斎念仏」の語は中國に現れるが、現在では月々の念仏、盆や葬送時の念仏として传承されている。直径20センチほどの鉦を叩いて念仏を唱和するが、太鼓が加わる所もあり、県内各地で講集団が結衆されてきた。

原町で、念仏講の人々が家々を次々にまわって令仏を唱える盆の棚経參りを、県立民俗博物館の奥野義雄さんらと見て回った。八島町も藤原町のも、鉢以外に大小二つの太鼓も用いていた。八島町にはシゼン、ハクマ、イ、バンドという鉢念仏三つとウタヨミとウチコミからなる太鼓念仏があった。「チャンカラカン」と地元では呼んでいた。

鉦と太鼓で詠う六斎念仏



東大寺大仏殿で八島町と東安堵による六斎念仏の奉納を終えて＝2008年7月12日、橋本紀美氏撮影

り、全曲の録音もした。念仏を先導するチョウシヨと他のヒラに分かれ、チョウシヨが一節唱えるとヒラがこれを繰り返す形式だった。最も重要な行事が盆の棚経参りで、家々でシヘン、ハクマイ、バンドの抜き読みをする。バンドは野辺送りに唱えられ、送り念仏といつた。シンコロは鉢念仏ともいい、鉢だけの掛け合いで部分があり、特に心に染みるものだった。

で六斎講が組織された。農繁期を除いて月に1回、講を催していた。セセン、ハクマイ、シンバンドウ、融通回向が伝わる。八島町と東安堵の六斎念仏もその後、県指定文化財となり、映像記録の作成、民俗芸能大会などでの特別公開も行われ、平成20（2008）年には東大寺大仏殿で念仏奉納も行われた。

これら三つの大和の六斎念仏が、令和4（2022）年12月25日に県立図書情報館で「六斎念仏実演と講演」として公開され、多くの聴衆が聴き入った。特に途絶えていた東佐味の念仏が研究者などが引き継いで実演されたことは、本当にうれしいことだった。美しく心に響く念仏の響き

平成2（1990）年5月には、大阪市平野区の融通念佛宗総本山大念仏寺の万部おねり法要で、安堵町東安堵の六斎念仏の特別公開を見た。その後、地元の活動も挂見し、話を聞いた。東安堵は奈良盆地中央部の集落で、融通念佛宗の檀家

り、全曲の録音もした。念仏を先導するチヨウシヨと他のヒラに分かれ、チヨウシヨが一節唱えるヒラがこれを繰り返す形式だった。最も重要な行事が盆の棚経参りで、家々でシヘン、ハクマイ、バンドの抜き読みをする。バンドは野辺送りに唱えられ、送り念仏といつた。シンコロは鉢念仏ともいい、鉢だけの掛け合い部分があり、特に心に染めるものだった。

これら三つの大和の六斎念仏が、令和4（2022年）には東大寺大仏殿で念仏奉納も行われた。

で、八島講が組織された。農繁期を除いて月に1回、講を催していた。

表三

(奈良民俗文化研究所代)